

## 学位論文審査結果の要旨

所 属	甲	三重大学大学院医学系研究科 生命医科学専攻 病態修復医学講座 肝胆膵・移植外科学分野	氏 名	藤永和寿
審 査 委 員		主査 白石 泰三 副査 奥田 真弘 副査 竹井 謙之		
<p>(学位論文審査結果の要旨)</p> <p>Hypertension and HCV infection are strong risk factors for developing late renal dysfunction after living donor liver transplantation: significance of renal biopsy</p> <p>【主論文審査結果の要旨】</p> <p>藤永らは論文において下記の内容を述べている。</p> <p>腎障害は、肝移植後の長期予後に影響を与える因子の1つとして知られている。脳死肝移植後の晩期腎障害(late renal dysfunction: LRD)の原因についてはこれまで様々な研究がされてきたが、それと比較し生体肝移植(living donor liver transplantation: LDLT)後のLRDについての報告はわずかである。</p> <p>藤永らは、早期にLRDを認識し、慢性腎不全へと進行していく前に、LRDの原因に応じた適切な治療により腎障害を改善することが、LDLT後の長期予後の改善につながると考えた。簡便かつ広く腎障害の指標として認識されている血清creatinine (Cr) 値を用い、LDLT後のLRDにおける危険因子の解明、また腎生検により腎障害の原因検索をすることの重要性を検討した。</p> <p>2002年3月から2008年7月までに三重大学肝胆膵・移植外科にて生体肝移植を施行した98例中、1年以内の死亡や追跡不能な21例を除いた77例を対象とした。LRDの定義は、術後1年以降で血清Cr値1.5mg/dl以上とした。術前・術中・術後での危険因子解析を行うとともに、LRD症例に腎生検を施行し腎障害の原因検索を行った。</p> <p>LRD群22例と非LRD群55例に分け検討すると、LRDの危険因子として、単変量解析では術前因子としてレシピエント年齢、高血圧、HCV感染、術前血清Cr値、術中因子としてGRWR(graft-to-recipient weight ratio)に有意差を認めた。多変量解析</p>				

では高血圧とHCV感染が独立危険因子であった。生存率曲線をKaplan-Meier法にて検討した結果、2群間に有意差が認められた。

経過中に腎機能の増悪、蛋白尿、全身浮腫を認めるようになったLRD群4例に腎生検を施行した。4例ともにHCV再感染を認め、そのうち高血圧の合併を3例に、糖尿病の合併を2例に認めた。病理組織学的には2例が免疫抑制剤による障害、1例が糖尿病性変化と診断され、HCV関連の膜性増殖性腎炎は1例のみであった。

今回の検討により、LDLT後のLRDは長期予後に影響すること、多変量解析からは高血圧とHCV感染がLDLT後のLRDの独立危険因子であることが確認された。特にHCV感染例においては腎生検の結果から、LRDの原因がHCVだけでなく、多様であることが判明し、最適な治療のためには腎生検を施行するべきと考えられた。

以上のように本論文は、高血圧とHCV感染が生体肝移植後晩期腎障害の有意な危険因子であり、腎障害の原因同定に腎生検は意義があることを明らかにした論文であり、学術上極めて有益であり、学位論文として価値あるものと認めた。

Transplantation Proceedings

Accepted : November 23, 2013

Kazuhisa Fujinaga, Masanobu Usui, Norihiko Yamamoto, Eiji Ishikawa,  
Ataru Nakatani, Masashi Kishiwada, Shugo Mizuno, Hiroyuki Sakurai,  
Masami Tabata, Shuji Isaji.